楢の若葉

佐藤垢石

青空文庫

いま、想いだしても、その時のことがはっきりと頭に浮かび、眼にも描かれる。

三十五、六年前の四月二十四日のひる前であった。私は十二、三歳の少年。父は三十七、八歳。溢れるような元気に満ちた壮者であったに違いない。

はやは、利根川の雪代水を下流から上流へ上流へと遡ってきた。はやという魚は、おいしいとほめるほどでもないが、産卵期が近づくと、にわかに活動が盛んになってきて、頭から横腹、尾の端まで紅殻を刷いたように薄紅の彩が浮かび、美装を誇るかに似て麗艶となるのである。そして腹の小粒の卵に、ある一種の風味を求めて、私の村の人々は毎年春になると、遠く下総国の方から遡ってくるはやを、飛沫をあげて流れる利根川へ釣りに行った。

その朝まだ薄暗いうちから、私ら父子も田んぼの畔まで母に送られて家を出て、利根川の崖下まで行ったのである。

父は二間半の竿を巧みに使った。私は、軽い二間半で道糸に水鳥の白羽を目印につけ、暁の色を映しゆく瀬脇の水の面を脈釣りで流した。

少年の私にも、忙しいほど釣れたのをみると、その頃の利根川には、ずいぶん数多くのはやがいたのであろう。二、三時間で、魚籠は一杯になった。魚籠の中で、バタバタと跳ねる魚の響きが、腰に結えた紐から身体に伝わってきて、何とも快かった。

腹がすいてきた。

『もう、帰ろう』

父は、にこにこしながら私を顧みて言った。もう朝の陽は一ひろほども空へ昇っていた。晩春の朝の微風が、砂丘の小草の若葉を撫でながら渡ってきて、糸の目印の羽毛をひらひらと動かす。

みぎわの小石には、微かにかげろうが揺れはじめていた。

私は父の言葉に心で応えて、口では答えなかった。それほど魚の当たりが忙しい。いまの目印の動きは、魚の当たりか、風の煽りか、その判断に固唾をのんでいる時に『帰ろう』と言う、父の言葉であったのだ。

わずかに、竿先へ煽りをくれて軽く鈎合わせをすると、掛かった。魚は、水の中層を下流へ向かって、逸走の動作に移った。やはり、水鳥の白羽の動きは、はやの当たりであったのである。

『帰りましょう』

と、私ははやの口から、鈎をはずしながら答えた。

赤城山の裾は西へ、榛名山の裾は東へ、そのせばまった峡の間に、子持山と小野子山が聳えている。子持山と小野子を結ぶたるみを貫いて高い空に二つの白い山が遠霞を着ているのは、谷川岳と茂倉岳とである。北の方、上越国境の山々はまだ冬の姿であるらしい。

私は、利根川の崖の坂路を登りながら、はるばると奥山の残雪を眺めた。そして、ぽつぽつと、父の跡を踏んで歩いた。

雑木林へ差しかかった時、父は、

『これをごらん』

こう言って私に、楢の枝を指した。何のことであろうと思って私は、父の指す楢の小枝へ眼をやったのである。楢の枝には、漉皮が綻びたばかりの若芽が、わずかに薄緑の若葉をのぞかせていた。

『この楢の芽を見な。この芽が樺色の漉皮を落として、天宝銭くらいの大きさの葉に育つと、遠い海の方から若鮎がのぼってくるんだ

よ』

こう、父は想い出深そうに、私に説明するのであった。そして、それは毎年、五月の端午のお節句が過ぎた頃である。その頃になると、河原の上に川千鳥の鳴き叫ぶ声を聞くのだが、川千鳥は下総の海の方から、鮎の群れを追いながら空を翔ってくるのだ。であるから、川千鳥が流れの上に、仮住まいして水面に、何ものかを狙うように羽搏きをするのを見たら、若鮎の群れは、もう丸い小石のならぶ瀬際をひたのぼりに、上流へのぼっていると思ってよろしい。と、細々と話してくれた。

二人は、いつの間にか路傍の草に、腰をおろしていたのである。

『鮎がきたら、二人で精一杯釣ろうね』

私に諭すように言う。ほんとうに優しい父であった。

それから、長い月日が流れた。しかし、この日の記憶は去らないのである。毎年、初夏がきて楢の青い葉が天宝銭ほどに育ったのを見ると、葉の面に父の顔が描き出される。そして、莞爾と微笑む。

私の父は、一家の経営には全く無能の人であった。つまり、経済ということには、ほんとうに無関心な人柄であったのである。そのために、私の家は年毎に田が一枚減り、畑が二枚と減っていった。

だが、私はいま昔の俤のない故郷の家を見ても、父を怨む気など少しも起こらない。私の想い出には、やさしい父というほか何もないのである。

鮎の姿が、眼に浮かぶ。釣った鮎を手に握ると、父の愛が蘇る。地下の父と、鮎とが渾然としてしまうのである。

竿を差しのべて、なぎさに佇む痩せた父の姿。家にあれば、何なりと村の人の言うことに、諾々とうなずいた好人物の父……。

鏡に映るわが白き鬢髪を見て、年毎に亡き父の俤に似てくるわが姿を想って、感慨無量である。

青空文庫情報

底本：「垢石釣り随筆」つり人ノベルズ、つり人社
　　1992（平成4）年9月10日第1刷発行
底本の親本：「釣随筆」市民文庫、河出書房
　　1951（昭和26）年8月発行
初出：「釣りの本」改造社
　　1938（昭和13）年発行
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年4月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

楢の若葉

佐藤垢石

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/